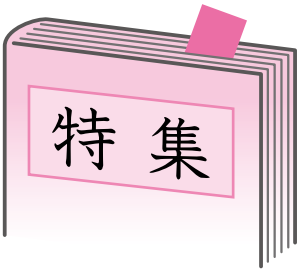
図書館だより
LIBRARY NEWS

2008年 秋号（通巻81号）

《2008.10.1 発行》

東海学園大学
名古屋キャンパス図書館
三好キャンパス図書館

http://www.tokaigakuen-u.ac.jp/lib/
〒468-8514 名古屋市天白区中平2-901
TEL（052）801-1528 FAX（052）804-1192
〒470-0207 西加茂郡三好町福谷西ノ洞21-233
TEL（0561）36-6755 FAX（0561）33-0165



わたしの一冊

皆さんにもきっと、いつまでも心に残っている一冊、誰かに紹介したいと思う一冊があるのではないでしょうか。
今回の「図書館だより」では図書館からの一冊をご紹介します。ぜひ皆さんもご自分の「一冊」を考えてみてください。

壮大な宇宙論 ―松井孝典『宇宙誌』―

加藤　孝男

NASAのみが世のさびしさを探査してゆくへもしらぬ恋のこころは

「恋」をテーマにして詠んだ私の短歌である。ロシアやヨーロッパ諸国、そして日本ですら宇宙開発に巨額の富を投じているが、その主役はなんといってもNASAである。火星探査にかぎらず、地球外生命をみつけだすことは、宇宙探査の最大の見せ場であろう。しかし、いまのところ肝心の火星でも生命の痕跡はなさそうである。人類を含めたこの地上の生物は、いずれ出会うであろう生命体を求めて、今後も宇宙空間をさまようはずである。

いうまでもなく宇宙開発は、アポロ計画がそうであったように、人類の知のすべてを結集した事業なのである。科学技術のみならず、宗教、哲学、芸術、政治、経済などを駆使し、我々は宇宙というものを、今日のようにイメージできるようになった。そんなことを教えてくれる一冊が、松井孝典の『宇宙誌』（徳間文庫 教養シリーズ）である。

この本はすごい。宇宙に関するあらゆることが書き込まれている。その意味で、理系、文系を問わず、楽しむことができる一冊である。

ビックバン理論以来、宇宙論は勢いづいている。神の一撃などともいわれた大爆発がはじめにあった。その時の衝撃によって、宇宙はいまも膨張していると考えられている。ニュートン以来、数式をもって描かれてきた宇宙が、一つの運動体として生き生きと甦ったのである。しかし、150億年前のこの爆発をだれも観てきたものなどいない。

拡張する宇宙のモデルを描けば、当然の事ながら、その先、すなわち宇宙のヘリの向こう側はどうなっているのかという疑問が起こってくる。その先は、無、虚無だと言ってもぴんとくるものなどいない。

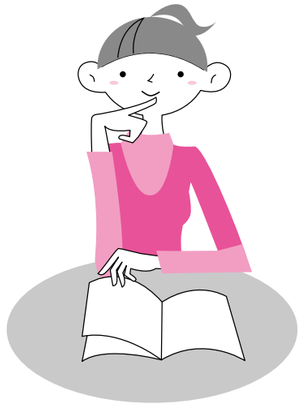
しかし、宇宙というものが、物質とエネルギーが存在する空間であることは間違いのないことのようである。ビックバン以降そこに時間という概念がくわわって、「宇宙には始まりの時があった」とするのが、現代科学の到達した一つの結論であった。

『宇宙誌』は、そうした壮大な時間を記述し、人類創生までを描いている。この本が出版されたのは1993年のことである。その後、98年に文庫となり、多少の訂正をくわえている。ハップル宇宙望遠鏡が宇宙空間から星の映像を送ってくるようになって、新たな事実がくわわったからである。近い将来、この本も大きく書き換えられる時がくるかもしれない。

もし、ビックバンが事実であるならば、我々は宇宙のヘリをこの眼で覗いて来なければならない。たとえば、人類がようやく宇宙の果てにゆきついたと思ったら、そこが仏様の目尻（まなじり）であって、ひとつの大きなまばたきによって、すべての世界が消滅してしまった、などということがあれば、さぞ面白かろうと思う。

（人文学部人文学科 教授）

先生の わたしの一冊



人間健康学部管理栄養学科 准教授　今井 具子

食べ物さん、ありがとう

川島四郎・サトウサンペイ著　（朝日文庫）

この本は「フジ三太郎名場面」、「夕日くん」などでおなじみの漫画家サトウサンペイ氏がその当時桜美林大学名誉教授であった川島四郎先生にインタビューを行い、その内容をユーモラスな漫画と対話集でまとめた健康づくりの知恵集である。第一刷は昭和６１年と今から２０年以上前のものであるが、「日本人のための栄養学講座」という副題からもうかがわれるように、素人にも簡単に面白く栄養学、食品学、食生態学等の話題を広く取り上げている。たとえば、ケニアの長寿のおばあさんの話から野菜を食べることの重要性について話を広げたり、脂と油や魚の話などからサラサラ血液の話に広がったりと話題が多岐にわたる。「肉食のライオンでもシマウマの未消化の草がたくさん詰まった内臓から食べる話」や、「ネズミをカルシウム不足のエサで育てると強暴になることから、子どものイライラを抑え、家庭内暴力を防ぐためにはカルシウムが必要な話」など、今でも食育に生かせそうな面白いトピックスが多い。また本のタイトル通り、この本全体に食べ物に対する感謝の気持ちがちりばめられており、栄養教育の原点を教えられる感がある。この本を手にした当時私は病院の栄養士として働いていたが、現場の業務に追われ、栄養士という仕事に夢が持てない状態であった。実は大学卒業時には京都府の学校栄養職員試験に合格していたものの結局採用がなく、今でいうプー太郎状態から、やっと手に入れた職がそういう状況であり、私の栄養士としての出発は惨憺たるものであった。その中で出会ったこの本は「勉強のための栄養学」しか頭になかった私には非常に新鮮であって、「栄養学から生態学まで広く面白く簡単に話ができる栄養士になりたい」と改めて思わせてくれた一冊であった。その後、１年足らずの間に、続編、続々編が発刊されており、私だけでなく当時の反響の大きさが伺われる。残念ながら川島先生はその後間もなく９１歳の高齢で没されているが、最近では世界各国の長寿地域・短命地域の疫学調査を行い、カスピ海ヨーグルトでも有名な家森幸男先生との対談集が刊行されている（２００５年「栄養学のABC　もう一度食べ物さんありがとう!」朝日新聞社）。前半は長寿のくにの食卓について、サトウサンペイ氏と家森先生との対談集を、後半は川島先生との対談集からのよりすぐりを、さらに食品素材別に「からだが喜ぶ料理レシピ」集まで掲載されており、食育がさかんな今、あらためてこの本の真価が評価されるのではと思う。５００円程度の単行本（アマゾンのインターネット通販では半額以下でも入手可能）なので、気軽に手にとって雑学としての栄養学を楽しんでもらいたい。



人間健康学部人間健康学科 准教授　伊藤 きよ子

ハートを伝える聞き方、話し方



八坂裕子著　（PHP 研究所）

本学園の短期大学で、以前、非常勤講師をされていたＳ先生のお宅を訪問したことがある。当時、先生はすでに 80 歳を迎えていらしたが、現役時代同様、美しく化粧をし、華やかな色柄のブラウス姿でにこやかに出迎えてくださった。年齢を重ねても華やかな装いが似合う先生を、うらやましく感じたことを記憶している。

この時、先生は突発性難聴を患っていたにも拘らず講座を聴講に出掛けていること、乗り物の中で人々が語り合うなかにも勉強になることがたくさんあることなど、楽しげに話してくださった。そうした会話の中で、事ある毎に開いて読んでいるとおっしゃっていたのが、今回紹介する『ハートを伝える聞き方、話し方』という本である。

本の目次を開くと、「会話は開我すること」「エラーは得点です」「悩んでもタダでは起きない」「言葉のダイエット」といったタイトルが 51 も並んでいる。これらは４つの章に分類されているが、それぞれのタイトルに繋がりはないから、どこから読んでも構わない。文章は平易で、1タイトル当たりのページ数は４～５ページしかない。教室で席に着いて先生を待つわずかな時間でも、１タイトルくらい読めてしまえそうな量である。

タイトルのひとつに「ストレスは友達」がある。その中に、「生きるという旅は、“10” を “3” で割るようなものなのです。どこまで行っても割り切れません」という文章が出てくる。割り切れずに余るものがストレスで、その存在は止むを得ない。だから、それを敵視しないで生涯の友達と考え、ストレスから出る信号（例えば休暇を求める信号）を読みとろう、と述べられている。この本が単なる聞き方、話し方のテクニックを記述した本ではないことがお分かりいただけるだろうか。

女性を対象として執筆された本だが、80 歳の先生が読み返していたこの本を、是非、性別を問わず一読してほしい。51 の文章の中に、きっと心に留まる一節が見つかるだろう。

経営学部経営学科 准教授　大矢 佳之

ビアフラ ー 飢餓で亡んだ国



伊藤正孝著　（講談社文庫）

「人間の歴史」を考える

日本では大阪で万国博覧会の開幕を控えていた頃、1970 年１月、アフリカ大陸の赤道近くに位置するナイジェリアで、内戦と飢餓の末に亡びた国があった。イボ族の「ビアフラ共和国」である。それを現地報告したのが、伊藤正孝著『ビアフラ:飢餓で亡んだ国』（講談社文庫、1984 年、なお初版は『ビアフラ潜入記』朝日新聞社､1970 年）である。

では、なぜそのイボ族が、周辺の民族から完膚無きまでに追い詰められ、滅亡しなければならなかったのか。黒人のイボ族は自らが「奴隷商代理人」となって他民族の黒人を奴隷商品として狩り集め、奴隷海岸を舞台にした奴隷輸出業務に携わって富を得てきたという 200 年前の歴史事実を抱えていた。そして、20 世紀になってその罪を贖わされなければならなかったのか。そのイボ族が「アフリカの日本人」と呼ばれていた。

これを地球の反対側の一過性の出来事として眺めていてはいけない。今年で、1868 年４月８日に明治と改元されてから 140 年になり、この間に日本国がアジア諸国に対して振る舞ってきたことを、はたしてアジア諸国はどのようにみているのであろうか。それを知ることは、これから将来の日本が取るべき行動指針のために必要である。

昨年から今年にかけて、その手掛かりを教える「近現代日本史」の書物が一つ登場した。広瀬隆著『持丸長者：日本を動かした怪物たち』（ダイヤモンド社）の「幕末・維新篇」、「国家狂乱篇」、「戦後復興篇」の三部作である。この著者は『赤い盾：ロスチャイルドの謎』をはじめ多数の著書をもち、一つ一つの歴史的事実について具体的な人物名を積み上げながら解明していくという方法に特色がある。人間の歴史には、いつの間にかそう「なっていた」というのではなく、それを「実行した」具体的な人間が必ず存在する。したがって、歴史的責任の一切は、その具体的な人間と国家にあるはずである。

※文中に一部差別的な用語がありますが、歴史的事実としてあえて使用しています。ご了承ください。

経営学部経営学科 准教授　上岡 一史

あゝ野麦峠－ある製糸工女哀史



山本茂実著　（角川文庫）

明治期以降、日本の富国強兵策を支えたのは製糸業が獲得する外貨だった。軍艦にせよ機械にせよ、すべて輸入に頼らざるを得なかったからである。この日本近代化の花形であった製糸業にも、その裏側に暗い歴史があった。本書は、著者が十数年間飛騨地方を旅し、360名余の元製糸工女たちの生の声を取材して書いた裏面史である。

明治中期以降、岐阜県・飛騨地方の貧しい農家の娘たちが11,2歳になると徒歩で、野麦峠などの険しい道をたどって製糸業の中心地であった長野県・諏訪地方へ働きにでた。そこで待っていたのは過酷な労働条件のもとで1日12時間をはるかに超える厳しい労働と、監獄のように監視された寄宿舎だった。

そんな彼女たちの中でも、生来器用でさほど苦労せずに優秀な成績をあげることができる者もいた。彼女らは百円工女などと呼ばれ、その持ち帰った金で親たちが田を買って地主になった、というようなケースもあった。しかし、多くはいくらがんばっても成績があがらず賃金を差し引かれ、ほとんどただ働き、持ち帰る金をほとんど得られなかった。

さらに悲惨だったのは、身体をこわした工女だった。過酷な労働環境のため、結核などの重病にかかる工女も多く、彼女らは何の補償もなく棄てられ、飛騨に帰って死に、あるいはその前に絶望して天竜川に身を投げた。

優等工女だったが、重病になり「スグヒキトレ」との電報を受けて飛んできた兄に背負われて、野麦峠で「アー飛騨が見える」とほっとしたように呟いてこときれた政井みね。やはり優等工女だったが重病にかかり、休息も与えられず、借金を残したまま働けなくなったことを詫びる親宛の遺書を残して川に身を投げた木原スズ。その他様々な実話から、歴史の裏側にも目を向けさせてくれる一冊である。

経営学部経営学科 教授　瀬川 久志

たば風



宇江佐真理著　（文春文庫）

人の一生は人を愛することによって決まるが、その愛が必ずしも現実に叶えられないことを、多くの小説や物語が「悲恋」として描いてきた。人は一体、現（うつつ）によって生きるのか、夢（まぼろし）によって生きるのか？男女の悲恋を描いたこの短編のモチーフになっているのは、題名と同じ、冬場の蝦夷松前藩を吹きすさぶ北北西の季節風「たば風」。極寒の冬、身を切るような風が吹き抜ける時にも、人々には生活があり逞しく生きてきた。物語は次のように始まる。「蝦夷松前藩の城下にある法源寺の山門に向かう時、西から吹いて来る強い風がまなの着物の裾をめくった」。密かに想い合っていた武家の二人の男女（まなと幸四郎）は、秋の祝言を控えて幸福の絶頂にあった。しかし幸四郎は突然の病に倒れ、半身不随の身に。縁談は、まなの意思を無視した母の強引な主張と、まなへの虐待によって破談に追い込まれる。まなは一旦は死を覚悟したしたものの、非情ともいえる母の「愛」を受容せざるを得なかった。まなは、平静を取り戻し親の勧めで別の武家へ嫁ぎ、子を設けて幸福な生活へと入る。しかしまなと幸四郎の二人を結ぶ赤い糸は、二人を劇的な再会へと導く。まなが慕う柳生新陰流の使い手幸四郎は不遇の身にありながらも、藩主の跡目相続の政争によって危機に瀕した、まなとその乳飲み子の生命を身を呈して守り、力尽き再び病に倒れ帰らぬ人となる。作者は「何も彼も夢でありながら、着物の裾を割って吹き込んでくるたば風の冷たさだけが、まなにとってうつつのことのように思えた」と結ぶ。「甘い夢」を叶えられず、もはや幸四郎の優しい面影を胸に暖めて生きていかねばならぬのもまた、まなにとっては「うつつ」であったのだろう。まなと母親そして幸四郎のそれぞれの生き方と想いに、囲炉裏の火のような暖かさを感じる。

経営学部経営学科 講師　西村 嘉夫

「見えざる手」が経済を動かす



池上彰著　（ちくまプリマー新書）

本年度から経営学部では「経済学Ⅰ」と「経済学Ⅱ」が1年生の必修科目になりました。「経済学」が必修科目になるのは開学以来初めてのこと。担当者としては大いに張り切りたいところなのですが、経済学は精緻な理論をマスターする理解力と、その理論を現実の諸問題に適用していく応用力が要求される学問。理論のとっつきにくさに加えて教科書の分厚さに圧倒されてか、正直これまで学生さんの間ではあまり人気のない学問でした。とはいえ、これからは必修科目ですから、全学生に一定のレベルに達してもらわなくてはなりません。理論も大事ですが、将来社会に出たとき役に立つよう経済時事についてもお話ししたいですし、現実の社会問題に関心を持ってもらう必要もあります。また、中小企業診断士や公務員試験には経済学の問題が出題されますので、そういった試験を目指している学生向けに試験対策の意味合いも込めなければなりません。これらの目標をすべて満たすために、講義では教科書とは別に毎回オリジナルのレジュメを作成し、経済関連のニュース・ドキュメンタリー番組のビデオを多用し、毎回に近く経済学の問題を解かせ…と怒濤の春学期が終わりやっと今一息ついているところです。

さて、講義が終わって改めて感じるのは、大学の講義はわずか14回。長いようで短く、全てを伝えるにはあまりに短すぎるということです。そんなわけで今回の「私の一冊」は経済学の推薦書として、池上彰の『「見えざる手」が経済を動かす』をご紹介します。著者はNHKの記者・キャスターとして活躍した人物です。1994年から11年間、NHKの「週刊こどもニュース」でお父さん役を担当していましたので、テレビで見たことがある方も多いでしょう。難しいことを易しく教える名手です。この本は、そもそも経済学というものがなぜ存在しているのか、どのような価値・役割を持っているのか、いつ生まれたのか、なぜ生まれたのか、どのような歴史を経て今のような形になったのか、などが様々な実例を通して易しく解説されています。経済学Ⅰで学んだ「市場」と「価格」の役割はもちろん、経済学Ⅱでこれから学ぶ「政府の役割」についても述べられています。講義を通じて経済学に関心がわいた方は是非読んでみてください。そうそう、私、２年後には発達教育学科に経済学を教えに行きます。同学科の学生さんにもお勧めですよ。

人文学部発達教育学科 講師　本間 章子

子ども・こころ・育ち
―機微を生きる―



山田真理子著　　（エイデル研究所）

私は、この本を幼稚園に出入りしている業者から薦められました。「はじめに」と「目次」に目を通してすぐ購入することにしました。「はじめに」の中に「何が欠けてしまったんだろう?何がゆがんでしまったんだろう?誰もが苦しみながら自問自答する子どもたちの事件。本書が、子どもたちのこころと共に歩もうとする人たちに何らかの示唆を提供できればと願います。・・・」と、書かれていました。私は、園児や孫の姿を思い浮かべながら、読み終えました。その中で第2章「電子映像メディアと暮らす子どもたち」では、保育現場の中で、最近、自閉傾向と類似した、視線が合わない、常道行動が増えていると感じているのでは・・・」と述べられていました。私が在職していた幼稚園でも教師の話が聞けない、多動である、視線が合わない等の課題を持った幼児がいました。その1つの原因として幼児がテレビ漬けになっていたのではないかということでしたので、この章は特に興味を持って読むことができました。「ノーテレビデー」「ノーテレビウィーク」等の実践の成果も具体的にわかりやすく掲載されていました。そこで、本園でも保護者に協力してもらい「ノーテレビデー」を実施しましたところ、本書と同じような成果がでました。このように、子育て支援の参考書にもなります。第3章では、言葉がでない、トラブルメーカー、けんか、安定基地等の事例を通して家族関係や親の問題、社会やメディア環境からの影響や保育そのものの課題のキーワードが簡潔に述べられていますので、保育者や親への素晴らしいアドバイスが得られます。第4章では、子どもに関わる仕事に就こうとする学生たちの人間としての器を育てるための取り組みが分かりやすく書かれています。人間としての「こころ」の土台を形成する最も大切な乳幼児期の問題に対して的確な示唆をいただける素晴らしい育児書です。是非、保育のプロを目指す学生には、熟読をしてほしい本です。

人文学部人文学科 准教授　村主 千賀

少年 M のイムジン河



松山猛著　（木楽舎）

私の大切な一冊として松山猛著「少年 M のイムジン河」を紹介します。イムジン河とは、臨津江のことであり、それは 38 度停戦ラインのことであり、私が生まれた年にはじめてライブで歌われ、後にラジオで流れ、放送自粛・発売禁止になったあの「イムジン河」のことです。この本を手にしたのは、趣味人としての松山猛に興味があったこと、そしてなぜか、レコードもなく電波にものらないあの歌を私が覚えていたからです。私がはじめて「イムジン河」を聞いたのは 14 歳のときです。中学二年生のクラス担任の先生はギターがとても上手で、放課後よく一緒に歌ったものです。そのとき教えてくださった一曲がこの歌だったのです。発売もされず、電波にのることもない歌が、十数年後私に届いたのは奇跡でしょう?発売禁止から三十数年後の再発売に際してこの「少年 M のイムジン河」は書かれました。松山氏の美しい旋律に出会った少年期のこと、38 度線への旅、「イムジン河」への思い。この本を読むにつけ、歌の「イムジン河」を口ずさむにつけ、近くて遠いかの国のことを思います。あるいはアジアのこと、世界のことを。また、この日本のことを。セントレアからたった一時間半、飛行機で降り立ったところには、「徴兵制」があり、そのすぐ先には「戦争」（停戦ライン）があります。また、日本で暮らす人々の中にも様々な差別や葛藤があります。この本のあとがきには、「イムジン河」はアジア版の「イマジン」なんだということが書かれています。ジョン・レノンは「国境や宗教に隔てられない世界、天国も地獄もない皆がお互いを認め合う世界を夢見た」と。一人思い煩っても何が変わるわけでもない気もします。けれども国と国との関係が難しすぎるなら、民族や歴史の壁を超えたところで、せめて人の縁、「個」のつながりを大切にしたいと思っています。（参考までに：映画「パッチギ」では全編にわたって「イムジン河」が流れています）

名古屋キャンパス事務部長　長谷川 悦児

行かずに死ねるか！ ー世界９万 5000Km 自転車一人旅ー



石田ゆうすけ著　（実業之日本社）

これまで読んだ書物の中で「一番」というのはすごく難しいですね。大江健三郎のような何かをつつむような文章で癒されたり、筒井康孝のような奇妙な小説も好きです。オートバイやサーフィンに夢中のときは、片岡義男の気取った文章が好きでした。「だから！好きな作家とかじゃなくって印象に残った本だって！」んーっ過去幼稚園の教員を少しやっていたこともあって、印象に残った本のなかに「絵本」率が高いです。「ゆきだるまのさがしもの」って本だったかな?ゆきだるまが、花を見たくて旅にでてさみしい思いや、怖い思いをたくさんして、やっと花を見つけたら花のある場所は暖かすぎて、溶けてけしまう。でも子供たちに助けられ、またゆきだるまになったときは、もう花にあこがれることはなく、「降り積もる雪の中に凛として立っていることが好き」とはっきりいえるようになった、っていうお話です。この絵本に書店で出会ったとき、自分の夢「先生」になりたくて、「某短大の職員」を辞め、幼稚園の先生になったばかりのときでした。それからたくさんのことがあり、今は「東海学園大学の職員」として働かせていただいています。今は胸を張って、大学の職員ですって言うことができます。教壇に立ち、直接子どもたちや学生に接することができない「職員」。でも、「職員」だからこそできることがたくさんあることに、心の底から気づくことができました。これも、この本との不思議な巡り会わせかなぁ、なんて思っています。

最近は自転車で世界一周した人たちの手記にはまっています。高校生のころ自転車で YH にとまり歩きながら、あてもなく旅をすることが好きでした。オートバイに乗るようになって日本地図の海岸線はおおむね走り回りました。石田ゆうすけ著の（「行かずに死ねるか!」世界９万 5000Km 自転車一人旅）興味のある人は読んでみてください。自分の力でしっかりと前に進むことの大切さと喜びを感じますよ!古いサイクリング自転車を拾ってきてレストアしました。時間を見つけては、地元中津川の山並みをあてもなく走り回るのが楽しみになっています。なんとも影響されやすい性格と自分でもあきれています。

図書館員のわたしの一冊

シズコさん

佐野洋子著　（新潮社）

「シズコさん」とは著者の母親の名前である。著者は幼少の時、手をつなごうとして瞬間的に母親に手を振り払われた記憶を、成人した今も消すことができないでいる。あの瞬間から母と娘のきつい関係が始まったのだ。

戦後、家族ともども北京から引き揚げ、波乱に満ちた現実を力強く生きた母。家の整理整頓をし、うまい料理をつくり、動物的母性愛で育児を行い、未亡人になってからも遅しく働き家族を支えた母。身勝手で我が儘で見栄張りだった母。しかし、母が呆け始めても娘の中で母との関係は変わることができない。母を許すことができない。しかし戦後の混乱期を生き抜いた母の生き方を娘は否定することができない。その負い目のために娘は無理をしても最上級の老人ホームを選んだ。

行き届いて美しく整った個室。いつも真っ白で清潔なベッド。細かい配慮の施された食事。産業化された高級老人ホームでの介護や待遇に口を挟む隙はない。でも、娘は姥捨て山へ母を捨てたような気分にさいなまれずにはいられない。

このエッセイは確執を心の中に抱えた娘からとらえた母の半生記であり、母と娘のエゴの闘いの歴史でもある。しかし母との心の軋轢と距離感は、著者自身の中で葛藤する愛情の裏返しではないのか。程度の差こそあれ、今どきの友達母娘といわれるような母娘関係にあっても、ひそかに内在する軋轢は誰にもあるはずで、著者の直裁で鋭利な感性をもってしても、到達することのできない母娘という宇宙的関係の深淵を垣間見る思いである。

そして、親が少しずつ壊れて行くのを見守ることが、どんなに絶望的で哀しく、また親の姿に重ねて自らの老いに向きあう恐怖が、ユーモアにつつまれた行間から心底にじみ出るコワーイエッセイである。

（著者 佐野洋子：絵本作家・エッセイスト）

三輪（名古屋）

夢をかなえるゾウ

水野敬也著　（飛鳥新社）

皆さんは、神様を信じますか？　都合のいい時だけ神頼みしてませんか？

物語は、平凡なサラリーマン「僕」が、名だたる有名人や成功者たちの集まる華やかなパーティーから帰宅したところから始まります。たまたま参加したパーティー会場で自分の存在自体がその場で否定されているかのようなあまりのレベルの違いに愕然とし、「僕」はインド旅行で買ってきたゾウの置物を相手にやけ酒をあおります。

そして、翌朝関西弁をしゃべる神様ガネーシャに起こされるのです。（なぜ、神様と「僕」が知り合ったのかは秘密です。）ここから、「僕」と神様ガネーシャとの物語が進んでいくのですが、この２人の駆け引きが実に面白い。またなぜゾウの神様が関西弁を話すのかがすごく不思議。そんな不思議で面白い世界にどんどんと引き込まれていってしまいます。

さて皆さんは、どんな夢をどんなかたちでガネーシャがかなえてくれたと思いますか?人間が成功したり幸せになったりするために一番シンプルでそして一番大事なことは何か。ガネーシャの教えはどんなことだったのでしょうか。

最近皆さんは本を読んでいて腹の底から笑いだしたことがありますか？　一度だまされたと思ってこの本を読んでみてください。皆さんも大笑いしてしまうこと請け合いです。こんな神様が身近にいたらきっと毎日神頼みしちゃいますよ。

（ガネーシャ：インドの神様で片方の牙が欠けた象頭が特徴。身体は人間で、太鼓腹と４本の腕を持つ富と学問の神様と言われている。）

林（名古屋）



クラインの壺

岡嶋二人著　（新潮社）

テープを一度ねじって端と端を合わせた形、「メビウスの輪」というものがあります。聞いたことありませんか？指で表をなぞっていくといつの間にか裏をなぞっている、というあれです。この小説の題名である『クラインの壺』とは外側を辿っていくといつのまにか内側になっているというものなのですが、重要なのはこの『クラインの壺』には境目も表裏もないというところでしょうか。

ジャンルはSFミステリー。仮想現実の世界へと入るゲームのモニターを務める主人公。あまりにもリアルな世界に主人公は興奮してのめり込んでいくが、頭の中に直接響く「戻れ」という声にゲームを中断させられる。一方、現実でも奇妙な出来事が起こり始める。

仮想現実と現実の境目が無くなったとき、何をもって現実とするのか。どのように区別すれば良いのか…。最後はホラーやスリラーとは違った、ミステリーとしての「ゾクリ」を感じられるはずです。

この小説が発行されたのは1989年。読んでいる途中で「あれ？携帯使えば良いんじゃないの？」は禁句ですからね！でもオススメ！

岡部（名古屋）

風が強く吹いている

三浦しをん著　（新潮社）

私はスポーツが好きではない。やるのも苦手なら、ルールがわからないので観ても面白くない。でも、スポ根小説は大好きだ。熱いカンジが私の好みだ。この『風が強く吹いている』も青春スポ根小説と言っていいだろう。たった10人の学生が箱根駅伝を目指す。

青春の汗を流し、一つの目標に向かって邁進する。努力、努力、努力の練習の日々。ラストは、みんなで肩を抱きあい夕日に向かって走る……というわけではない。紆余曲折を経て箱根駅伝を目指す10人は、趣味も違えば嗜好も違う、目指す将来も違う寛政大学の学生たちだ。全員が長距離の経験者でもなく、陸上に興味があるわけでもない。走るために生まれたといわれる程の実力の持ち主、走（カケル）も過去の苦い経験から今一つやる気がおきない。そんなメンバーを、故障を抱え陸上への情熱を燻らせているハイジが半ば強引に引っ張っていく。スポ根の登場人物としては不釣り合いな面々だが、だからこそ面白い！

ハイジは言う、「君たちに頂点をみせてやる」と。頂点とは何か？メンバーは頂点を味わえるのか？それは自分で読んで確かめてほしい。

諸留（名古屋）

マリカの永い夜・バリ夢日記

吉本ばなな著　（幻冬舎）

海外旅行の行き先として人気の高い神々の国・バリ島が舞台の小説と著者自身の旅行記の二譚。小説はマリカという多重人格の少女とジュンコ先生のお話。どちらの作品も、著者の風景や感覚の描写の巧みさと、素晴らしい挿絵や写真により、日本ではほとんど感じない自然のエネルギーや密度の濃い空気、そしてその中に溶け込んでいる目には見えない精霊の気配や、パワーを感じられるような気がします。普段あまり読書をしない人にも読み易く、忙しい人には気分転換やショートトリップ気分も味わえるのでお勧めです。

バリに行く予定がある人は、予習のつもりで旅行前に読むとテンション上ること請け合いです！ちなみに私は、これを読んでずっと念願だったバリ旅行を、去年やっと果たしました。バリに行ったことがある人が読むと現地での感覚が蘇り、またバリに行きたくなるので注意が必要です。あー、またバリに行きたくなった！！

久保（三好）

西の魔女が死んだ

梨木果歩著　（新潮文庫）

なんだか忙しくて追われるように過ごし、日々の生活を疎かにしてるなぁ・・・と感じた時、無性に読みたくなるのが、梨木果歩の『西の魔女が死んだ』です。私の中でこの本が読みたくなる時は、ちょっと生活が乱れイライラしてきたサインだなって分る基準となる程の、何度読んでも心洗われる気がする大事な１冊。

号泣するとかドキドキハラハラするとかいうわけでもなく、大きな事件が起こるでもない、学校生活になじめなかった中学１年生のまいと、実は魔女だというそのおばあちゃんの１カ月の田舎暮らしのお話。魔女にとって最も大事な、自分で決めたことをやり遂げる意志の力を鍛えるために、魔女修行という名の規則正しく、何事も自分で決めて、自然に親しみながら丁寧に１日１日を過ごしてゆく日々。



読み終わった時にじんわりと心に染み込み、自分の生活を見直し、丁寧に入れた紅茶が飲みたくなります。

曽我（三好）

座右の日本

プラープダー・ユン著　（タイフーン・ブックス・ジャパン）

みなさんは「サブカルチャー」という言葉を知っていますか？

ハイカルチャー（絵画・純文学・クラシック音楽）と、一般大衆的娯楽の間にあって、趣味的（おたく的？）な位置づけだそうですが、若者にとっては「おっしゃれー♪」な存在らしいです。プラープダー・ユンはタイを代表するサブカルチャーの星!?で、作家、脚本家、雑誌編集者、評論家、グラフィックデザイナー、イラストレーター、フォトグラファーとしても活躍しています。あらゆるカルチャーにアンテナをはり、豊かな感性と表現力でマルチな才能を発揮しているアーティスト。「日本は　ぼくの恋人」と公言し、日本ウォッチャーとして知られるプラープダー。日常気にもとめていなかった出来事が、外国人の目を通して、あらためて日本を見つめるきっかけになる内容です。

映画から漫画、建築、そして風呂やトイレまで、現代の若いタイ人の目線で語る新鮮な日本レビュー本です。

浅井（名古屋）

波のうえの魔術師

石田衣良著　（文春文庫）

この本は、経営や経済に関心がなかった私に「株って面白い！」と思わせてくれた１冊です。読んだ後は株取引をしてみたくなりましたし、他の経営関係本も読む気になりました。

三流大学卒の就職浪人・白戸が、謎の老投資家・小塚に株投資を教え込まれ、手を組んで大都市銀行に挑戦していくという内容です。・・・と書いてしまうと「難しそうだな」と思ってしまいますが、そこは『池袋ウエストゲートパーク』などを書いている“石田衣良”。青春小説としても楽しく読めます。（もちろん株の知識があった方がより楽しめると思いますが。）パチンコで生計を立てていた白戸が、小塚老人に仕込まれて投資家へと成長していく過程は、わくわくするポイントです。石田衣良の作品が好きな人でも、読んでいないことが多い「意外な１冊」でもあります。



水谷（三好）

アルジャーノンに花束を

ダニエル・キイス著　（早川書房）

この本は私にとって衝撃的な出会いの一冊でした。知能指数の低い主人公が、手術によって天才になっていくというお話なのですが、これと同じ手術を受けたねずみの「アルジャーノン」が、驚異的な知能を得たのち急激にその能力がおちてゆく過程をみている主人公の様々な葛藤がなんともいえず、哀しくせつない物語です。そして、その過程を主人公が「経過報告」として綴っていくのですが、知能が上がるにつれて今まで自分が感じていた事と現実との違いを目の当たりに感じ、その変遷なども文章として描かれていきます。人それぞれの思いがこめられ、最後まで胸が熱くなり感動できる一冊です。　この作品は映画化もされましたが、私はこの作品は、やはりこの文章でしか伝わらないものがあると思います。「生きる」ということ、社会におけるつながりかたの大切さをあらためて考えさせられます。



とにかく是非読んで頂きたい一冊です。

前津（名古屋）

和力　日本を象る

松田行正著　（NTT出版）

これは正に日本と世界の文化・生活・歴史を比較した話である。この文中では二十四項目に分かれていて、その中でも特に、籠（ろっかく）＝六角は世界的に展開されているキッコーマン（亀甲萬）にも見られるように六角形のなかに萬の字が入っていて、あたかも全世界の人々が、満足出来る商品であると思われる登録商標である。これこそ日本の生活の中から生まれ出てきたデザインされたものであろう。

又、正立方体は正方形の六面体であるが、これを斜め前から見ると六角になり、三角形を上下逆さまに重ね合わせるとその角は六角形になる。

又、日本では、幕末ころからひっそりと発達してきた六曜日（先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口）があり一般のカレンダー等に記載されている民間の暦が発達し、明治・大正をへて戦後全日本に広まった。この六曜日は一カ月を五等分して六日を一定の周期にしたのが六曜日で特に大安は「験を担ぐ」といった風習にもなり結婚式やお祝い事をする時に利用するようになった。

この様に、日本文化「バンザイ」と云いたくなる様な本である。

米川（三好）

くっすん大黒

町田康著　（文春文庫）

田舎から出たてホヤホヤの大学生だった頃、垢ぬけていて憧れだった友人Nちゃんから「この本おもろいで!」とすすめてもらったのが、私と町田康との出会いでした。

無職・酒びたりのダメ主人公が、部屋に転がっている金属製の大黒様を捨てようとする、それだけの話で腹をかかえて笑えるなんて。「小説はストーリーこそ命」という自分の価値観を揺るがす体験でした。言葉と文章のリズムだけで、人をこんなに笑わせることは可能なのだという衝撃と、おしゃれで大人っぽいNちゃんが、登場人物が絶叫したりカメを爆発させたりの、常識から大幅にはみ出した奇矯な内容の小説を読んでいるのだという衝撃。人は見た目で判断できないということも知りました。



一生のうちで本を読んで衝撃を受ける体験が何度できるものかわかりませんが、間違いなくその一回として記憶に残る一冊です。そういう本を増やすことが私の読書人生の醍醐味かな、と思っています。

深津（三好）

きまぐれロボット

星新一著　（角川文庫）

ふとしたきっかけで人生が変わることがあるように、この本は私の読書人生に少なからずの影響を与えてくれた。

出会いは中学１年生の頃、そろそろ子供向けの本ではなく小説でも読んでみようと近所の本屋に行った時、なにげなく手に取ったのがこの１冊だった。薄くて表紙も可愛かったというのが購入した当時の理由であったが、そんな装丁に反して中身は世の中の風刺を込めたSF小説。１編の平均が約4,5ページ程度という短い作品が30編以上収録されており、ひとつひとつの結末がまさに「予想外」その面白さに瞬く間に読み終えてしまった。後になってこの作品の著者が有名な人物であったのだと知るのだが、その頃の私は、ただただ面白いという理由で星新一の作品を読み耽っていたのを覚えている。

その後、いろいろな作家の作品を読みそれぞれに感動や楽しさを感じてきたが、手が空いた時など、気付くとこの著者の作品を読み返している自分がいる。当分この読書スタイルは変わらないと思うが、この先どんな本が私を夢中にさせてくれるのか楽しみである。

赤坂（名古屋）

植物及動物

第1巻　第1号（昭和8年）～
第11巻　第12号（昭和18年）

（養賢堂）

私がこの図書館に勤め始めて間もない頃、一人で雑誌室に籠って欠号調査をしていた時にこの雑誌と出会いました。

最終号の目次に「謹告!!本誌は本號を以て一勝ち抜くまで一休刊す」とあります。見れば発行は昭和18年12月。物資が不足してきたのです。昭和８年に発行された第１巻より明らかに紙質が悪いのもわかります。そして「植物及動物」を扱った雑誌らしく、本誌の生命は滅したのではなく休眠状態に入ったようなものであり、近い将来再起することを期すと記されて幕を閉じています。

ほんの何十年か前に戦争によって中断せざるを得なくなった研究があり、雑誌があり、動植物に例えて再起を計ると記した人がいて、それが今ここにあると思った時、なまじな小説やドラマより胸に迫るものがありました。

「わたしの一冊」という今回のテーマには沿わないかもしれませんが、それ以降誰にも開かれることなく今も雑誌室の片隅にあるその雑誌のことが、忘れられないのです。

坪井（名古屋）

本格小説　（上・下）

水村美苗著　（新潮社）

名作「嵐が丘」が好きな方ならこの作品をぜひお薦めします。日本版「嵐が丘」といったところでしょうか・・・軽井沢と世田谷を舞台とした“ようこ”と“太郎”の恋愛を中心に話は進みますが、さらに戦後の日本社会を背景とした人間の浮き沈みをあらわしている大河ロマン小説ともなっています。最初の前置きが大変長く、そこを通り越して上巻の後半部までいかないと、本編（ようこと太郎の話）までたどりつけません。しかしそこからが、夢中になって一気に読めると思います。すべて一人称で語られていますので、読み終えた後、この話は本当にあったことなのではないか?と錯覚におちいりました（笑）。



個人的に“ようこ”は好きではないのですが、女としては幸せな一生ではないかと思います。ただし“太郎”の方はどうだったのでしょう?何度も読み返した作品ですが、読むたびに軽井沢へと行きたくなりました。

近藤（名古屋）

二十八光年の希望

辻仁成著　（集英社文庫）

読み終わった後、しばらくは溢れ出る感情を制御できずにいた。その原因は、あの場面のあの言葉、というように限定できるモノではなく、何だか分らないのだが、まるで魔法をかけられたように全身のふるえが止まらない。人は子供でも小動物でも、純粋でまっすぐなモノに弱い。この本の主人公ハナも、陽気で元気で純粋な女性である。日本人として、そして女性として初の三ツ星シェフを目指し、フランスのレストランで毎日元気よく働くハナ。料理に全てを注ぎ、まるで感情を封印したかに見える「将軍」こと総料理長ジェローム。陽気なハナに堅物のジェロームの心は解かれていき、禁断の恋に落ちる。ジェロームは愛する喜びを知り、二人は全力で愛し合う。しかし、運命とはいえ残酷な現実が二人に襲いかかる…。



純粋さが生み出す感動。愛の持つ力の素晴らしさ。感情のリミッターが外れる瞬間を、ぜひ体験してください。

澤田（名古屋）

壁を破る言葉

岡本太郎著　　（イースト・プレス）

言葉にはいろいろな力があると思います。
その一言で落ち込んだり、勇気づけられたり…
私がお勧めする一冊は、岡本太郎が生前語った名言集です。

あの眼光の目線の先に広がる世界を、少しだけ同じ角度で覗けるような嬉さ、真っすぐな感情とその力強い言葉の数々は岡本太郎そのもの。

「すらすらといくらでも溢れ出てきて、無限につくれるような気がするときもある。壁にとじこめられて、ニッチもサッチもいかない、悩めば悩むほどいきづまってしまう、絶望の季節もある。そういうとき、どうするか。焦らない。自分と向き合うチャンスだ、と思ってじっくり腰をすえて、自分はほんとうに何がしたいのか、見極めることだね。」

何かの壁にぶっかった時、ページをそっとめくって見て下さい。

心の中で呟いてみると何だか強くなれたような、そんな一言に出会えるかも知れないですよ。

国常（名古屋）

そして誰もいなくなった

アガサ・クリスティー著　清水俊二訳　（早川書房）

それまで全くと言っていいほど本を読まなかった私が、活字の世界へドップリ浸かることになった記念すべき１冊です。世界や日本の文学全集、教科書に載っていた文学作品には目もくれずコミックに明け暮れていた時、出会ったこの本! 何があっても古書店には持ち込まず、今も手元に置いています。（クリスティーの全作品買い揃えました）

この本に出会わなければ、常に本が傍らにある環境なんて考えられなかったでしょう。現在のチョット偏った読書傾向（探偵ものや司法ものが大好き）にもしっかり影響を及ぼしています。

さて、この作品の内容はというと…。U・N・オーエンと名乗る人物からインディアン島に招待された10人の男女。やがて暴かれる犯罪の秘密。マザー・グースのメロディに沿って次々に起こる連続殺人。テーブルの上に飾られていた10人のインディアンが1人姿を消すと共に、1人、また1人と犠牲者が増えていく。次の犠牲者は誰?そして犯人は?

上質な心理サスペンスが味わえる第一級のミステリー作品で、発表後60年を経ている今日でも世界中のミステリーファンに愛されている作品だと思っています。

峯野（三好）



お知らせ

他機関への複写依頼数の推移

自分の読みたい論文が掲載されている雑誌が図書館にない場合、他機関へ複写依頼をすることができるのをご存知でしょうか。複写依頼をする場合は、カウンターで専用の用紙を受け取り、それに必要事項を記入して申し込んでください。あとはこちらでその雑誌を所蔵している図書館を探して、そこからコピーを取り寄せます。ずっと以前から行っているサービスですが、インターネットで簡単に論文を調べられるようになったためか、授業の進め方が変わってきたのか、ここ数年で急激に依頼件数が増えました。今回平成 13 年度からの推移をグラフにしてみましたが、ご覧の通り平成 18 年度から突然件数が増えています。平成 19 年度は一見少なくなっているように見えますが、web からの本文ダウンロード件数の統計を見ますと、膨大な量の本文が利用されており、それらのデータベースがなければ依頼件数もさらに増えていたことが予測されます。

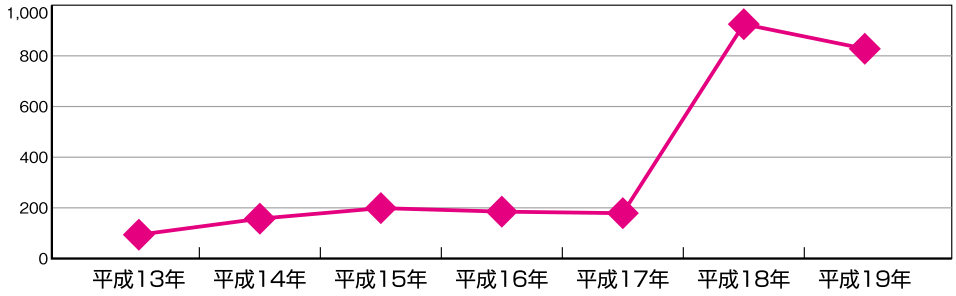
少しでも皆さんの論文探索の手助けになれるよう、また少しでも早く本文を手に入れることができるよう、図書館でもいくつかのデータベースを導入しています。これらを十分に活用して参考文献を集め、自分の論文やレポートを書く時の手掛かりとしてください。

ただ残念なことに、このテーマの論文なら何でもいいから、というような理由でやみくもに複写依頼を申し込んでくる学生も、最近少なからずいるように感じます。コピーが届いたことを連絡してもなかなか取りに来ない人も増えてきました。厳しいようですが、依頼申し込みは本当に必要なものだけにしてください。“何でもいい”のであれば図書館で所蔵している雑誌や、データベースで本文を探すという手もあります。カウンターに相談してみてください。複写依頼とは学外の機関に依頼することです。依頼された図書館やその他の機関の人が時間を使ってコピーを取ってくれているのだと思って、自分にとって本当に必要なものを申し込むようにしましょう。そうであれば、皆さんのお役に立つべく図書館はいつでも協力いたします。

※各種データベースは図書館のホームページ　http://www.tokaigakuen-u.ac.jp/lib/ の
データベース･サービスのページからご利用ください。（学内からのみ利用できます）

■他館複写依頼推移（件）

平成 13 年	94
平成 14 年	146
平成 15 年	199
平成 16 年	185
平成 17 年	179
平成 18 年	925
平成 19 年	828



編集後記

毎回、図書館だよりは何かテーマを決めて作っています。たとえば前回は「笑い」、その前は「水」という具合で、そのテーマに沿った文章を先生方に書いていただいたり、関連した本を紹介したりしています。

今回も何かテーマを決めるべく編集会議を開いたのですが、その中で「たまにはもう少し字数をとって、しっかりと本の紹介をしたらどうか」との声があがったことから、「では本の紹介自体をテーマとしよう」という運びになりました。

読み応えたっぷりの図書館だよりになったと思いますが、いかがだったでしょうか。

普段いろいろな本を読んでいても、本の紹介、特に「一冊」を紹介しなくてはならないとなると、案外難しいものです。面白かったなと思うものがあっても、「わたしの一冊」と考えると、もっと紹介すべきものが他にあるような気がしてしまうのです。先生方もいろいろ考えてくださったと思いますが、今回図書館員もかなり迷いました。

この中に皆さんの好きな本は入っていたでしょうか。また、読んでみたいと興味を引くような本はあったでしょうか。あの先生がこういう本を、と意外に思うようなものはありましたか。

我々が迷いに迷って選んだ「一冊」を、どうぞ皆さんも楽しんでください。